

## 研究報告

多段接ぎ木法を用いたトマトにおける  
複合土壌病害の防除効果岐阜県中山間農業研究所中津川支所 <sup>くま</sup>熊 <sup>ざき</sup>崎 <sup>あきら</sup>晃

## はじめに

トマトの営利栽培においては施設が必須であり、栽培圃場が固定されることから土壌病害がまん延している。これら土壌病害対策としては接ぎ木の利用が一般的であるが、様々な病害が複合的に発生することから、十分な効果が得られない場面も多い。栽培現場では化学薬剤による防除でも十分な効果が得られなかったり、農家から化学薬剤以外の対策を求める声も多い。

これまでにトマト多段（三段）接ぎ木（図-1）はポット試験において青枯病および褐色根腐病の発病を抑制することが報告されている（中保ら，2013）。今回、トマト夏秋作型の実際の栽培現場において還元土壌処理と多段接ぎ木を行い、青枯病、褐色根腐病に対する防除効果を明らかにするとともに、その生産性を評価した。

## I キルパーならびに還元土壌処理が青枯病菌密度に及ぼす影響

ナス科青枯病の汚染圃場において、3か年にわたり、

キルパー処理、土壌還元処理、無処理と異なる処理を行い、土壌深度ごとの青枯病菌の動態を調査した。

## 1 材料および方法

## (1) 試験区の構成

キルパー処理区 2013～15年、毎年4月中旬～5月上旬の間で14日間、キルパー 60 l/10 a を希釈散布処理。

土壌還元処理区 2013年上記キルパー処理を、2014～15年、毎年4月中旬～5月中旬の間で21日間処理した。20 l/m<sup>2</sup>の水を施用したのち、7.7 g/lの換算で希釈した糖蜜を130 l/m<sup>2</sup>施用（糖蜜処理量1,000 g/m<sup>2</sup>）した後、POフィルムで土壌表面を被覆した。

無処理区 植物残渣の持ち出し、耕起のみを行った。

※6 m×20 mの雨よけパイプハウスを一つの処理区とした。各区ともナス科野菜の連作圃場で、処理開始前には「がんばる根」を台木としてトマトを作付けした場合、30～50%の青枯病の枯死株が出ていた。

## (2) 青枯病菌密度の測定方法

2013年作付け終了後、2014年土壌処理終了後、作付け終了後、2015年土壌処理終了後、作付け終了後の5

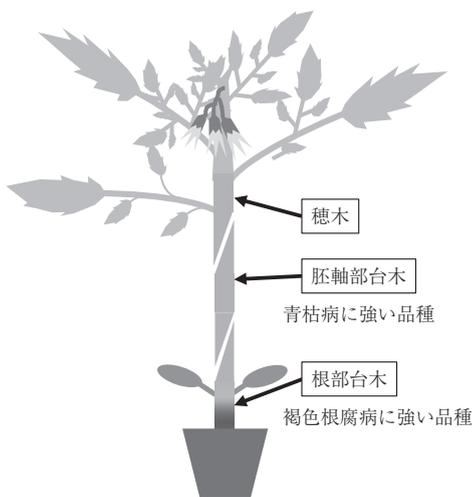


図-1 多段接ぎ木概念

Double Grafting Tomatoes to Control Ralstonia Wilt and Corky

Root. By Akira KUMAZAKI

(キーワード: トマト, 多段接ぎ木, 青枯病, 褐色根腐病)